

# 埼玉の灌漑用具

—いわゆるスッポンをめぐって—

柳 正 博

## I はじめに

当館では、昭和44年の開館から現在に至るまで、8000点をこえる有形民俗資料を収集してきた。昭和58年には、このなかの、地域的特色を示す生産・生業に関する資料1640点が「北武蔵の農具」として国の重要有形民俗文化財に指定された。こうした先達の努力により、館有民俗資料の体系化がなされたわけであるが、今後は少しでもこれらの意味づけを進めていくことがわれわれに課せられた使命であると思っている。とりわけ、当館の立地から、低地稲作地域における民俗資料の調査・研究を念入りに行わなくてはならないと考える。

小稿は、そのごく一部であるが、かつて稲作地域で用いられた灌漑用具に関する調査報告である。これを取り上げたのは、この稿の中心テーマであるスッポンを資料調査で目にすることが少なくなること、そしてその割に現在これについての伝承が覚束ない状態で、調査が急務と感じたからである。おそらく今を逸すると、この資料の記録はなかなか困難でないかと思うのである。灌漑用具については、今までに多くの報告書に掲載されているが、これらをふまえ筆者自身の調査と合わせて若干の整理を試みようとするものである。

## II 灌漑用具について

埼玉県内の稲作を見ると、河川やため池等を利用した用水による移植栽培（植田法）と、天水を使う伝統的直播栽培（摘田法）を上げることができる。灌漑用具が用いられるのは、主として前者の場合である。近世の農学者、大蔵永常は、著書『農具便利論』のなかで、「夫農作の地を見立てるにハ、第一水利を先とし土味と寒暖とを考え其土地に応ずるものを見立植るにあり。たとへ地味よく糞養よくても水がかり悪ければ全事なし」と述べ、水利の重要性を説いたうえで灌漑用具を解説した。農作にとって大切な水というものは、元来自然の流れにしたがって確保できればそれにこしたことはない。しかし、水の条件の悪いところでは、いろいろな道具を考案し、作物が順調に育つよう努めたのである。

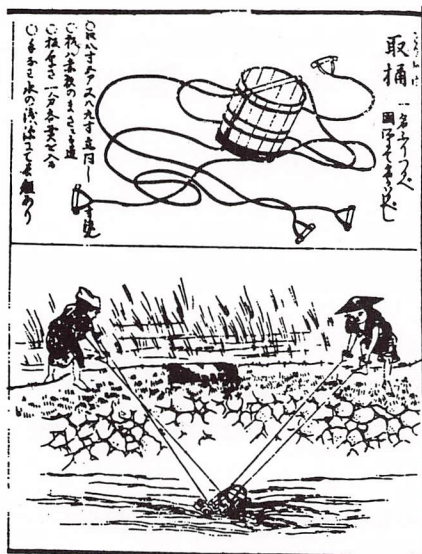
当館には、ミズグルマ・スッポン・オケなどの灌漑用具が多数収蔵されているが、まずこれらについてひととおりがめた後、スッポンに主眼をおいて少し詳しく報告するつもりである。これ以外に、溝から土をあげる用具や藻刈りの鎌なども灌漑用具として考えられるがここでは省略する。

灌漑用具のなかで、構造上いちばん単純なのはオケである。『農具便利論』に「取桶」とか「揚水桶」とあり、その細工は、桶の板が一般に比べ厚く重いようだと記されている。使い方は、桶の両端と底を結んだ縄を、二人ががりで持ち、ふるようにして水をかい上げるのである。手縄の長さは水の深さによって決まる。この作業は一見たやすいように感ずるが、お互いの意気が合わないと水をうまくすくい出すことができず、意外に困難だという。

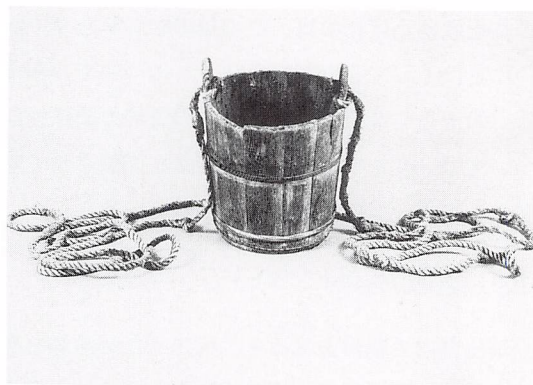
当館所蔵のオケは、第1表に示すとおりで、採集地が行田市周辺に集中しているにもかかわらず、さまざまな呼称が見られる。その使用年代は一律でなく、主力として用いられたのは、おおむね第二次世界大戦のころまでと思われるが、なかには昭和40年代までという使用例もある。県東部の八潮方面では、この桶をウツルと呼んだ。

桶の代わりに、バケツを用いた事例もある。行田市埼玉のK家では、昭和30年代まで、用水からバケツ（7升）で苗代に水を汲み上げていた。その後バチカルというポンプに変化した。この時はたいへん楽になったという感想を述べられている。

スッポンは、細長い木箱の枠の中に弁をつけた棒を差し込み、その開閉によって水を汲み上げるしくみで、水鉄砲の原理を応用したものと



第1図 取桶（『農具便利論』）



ウチオケ（採集地 行田市埼玉）

呼 称	採 集 地	材 質	使 用 年 代	法 量
ウチオケ	行田市持田	杉	明治から大正まで	口径 31cm、深さ37cm 重さ 1.4kg
カイドリオケ	行田市樋上	杉	大正から昭和40年代まで	口径 31cm、深さ39cm 重さ 1.5kg
ミズカイオケ	行田市谷郷	杉	大正から第二次世界大戦まで	口径 28cm、深さ38cm 重さ 1.4kg
ミズカイオケ	吹上町本町	杉 たがは竹	明治から大正まで	口径 31.5cm、深さ39cm 重さ 2.1kg
オケ	川里村赤城	杉	大正から昭和10年代まで	口径 26.5cm、深さ32cm 重さ 1.6kg

第1表 当館所蔵のオケ

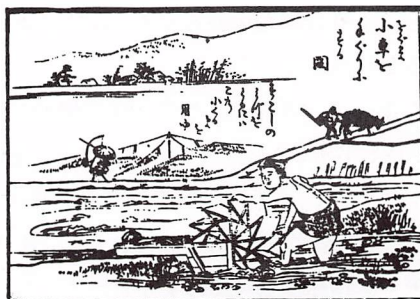
いえる。これについては、次章で詳しく述べる。

次に、ミズグルマであるが、『農具便利論』にはこう記されている。すなわち諸国一般にむかしから、用水路の水を水面より高い田畑へあげるには龍滑車を使っていた。しかし、寛文年間に大阪・農人橋に住む京屋七兵衛、清兵衛という人が「踏車」という揚水機を作ったというのである。そして、宝暦安永のころまでに各地に普及し、龍滑車にとってかわったという。このほか、「小車」といって、苗代などの狭いところで用いる手動式のミズグルマや、大きな用水路や川にかける「二人踏み」と称する大型のミズグルマもあるという。

ミズグルマは、ハネの部分の水につかる深さが必要で、低いところから高い場所へ水を揚げる事ができた。ハネを一回踏むと、バケツ一杯くらいの水を揚げる事ができたという。しかし、かなり高価なものだったので、大きな農家でなくては持てなかった。

当館には、第2表に示すミズグルマが収蔵されている。収集範囲は今のところ行田、吹上方面に限られており、形態は足踏式と手動式が見られる。これらは、おそくとも第二次世界大戦ころには姿を消している。

草加市周辺では、「足踏式揚水機」が使われていた。石井俊三氏の調査によれば、これは、ガッチャンガッチャンとか、ジャッキンジャッキンと呼ばれたもので、草加市内にある高橋水機の



第2図 小車（『農具便利論』）



ミズグルマ（北川辺町駒場）

採集地	材質	方式	使用年代	法量
吹上町下忍（N家）	杉	手動式	大正から昭和初期まで	高さ 138cm、長さ195cm ハネ直径94cm
行田市埼玉（S家）	杉	足踏式	大正から昭和初期まで	高さ 212.5cm、長さ213.5cm ハネ直径130cm
行田市上池守（N家）	杉	足踏式	大正から第二次世界大戦まで	高さ 165cm、 ハネ直径145cm
行田市佐間（T家）	杉	足踏式	明治から昭和10年代まで	高さ 217cm、 ハネ直径141cm
行田市持田（O家）	杉	足踏式	大正から昭和10年代まで	高さ 214cm、長さ235cm ハネ直径140cm
吹上町鎌塚（U家）	杉	足踏式	大正から第二次世界大戦まで	高さ 165cm、長さ195cm ハネ直径163cm
行田市埼玉（G家）	杉	足踏式	明治から大正まで	高さ 226.4cm、 ハネ直径158.2cm

第2表 当館所蔵のミズグルマ

製作である。これは、2つのペダルを交互に踏むことにより、筒の中の弁が上下し、水をくみあげるしくみになっている。

この揚水機の考案は、御当主の先代によるもので、昭和4年に構想があったが、技術も設備もなかったので、2年間市内の鉄工所で修業し、昭和6年に製造・販売を行うようになったのである。第二次世界大戦が勃発すると、ここも軍需工場と化した。戦後揚水機の製造を再開した。販売期間は、5月から6月で、多い時は、400台もの注文があったという。流通範囲は、草加市をはじめ越谷、川口、八潮、三郷辺りから東京都足立区、葛飾区、江戸川区に及んでいたが、県北への販売はない。県東部のみに見られる独特の揚水機といえよう。

灌漑用具には、ほかにもパチカルや、ヒューガルと呼ばれる動力のポンプを上げることができるが、ここでは割愛する。



足踏揚水機

(高橋水機撮影、草加市立歴史民俗資料館所蔵)

### Ⅲ スッポン

スッポンは、前述のように細長い木箱の中に弁のついた棒を入れ、その開閉によって低いところから高いところへ水を揚げるものである。この道具は現在ほとんど使われませんが、資料調査にうかがうと、物置の片隅にほこりをかぶったまま保存されている例が少なくない。冒頭でも述べたように、しだいに忘れ去られつつある資料といっても過言でないので、ぜひこの機会に調査したいと思ったのである。この道具からどんなことがわかるだろうか、いろいろな角度からアプローチしてみたい。

#### 1 呼称

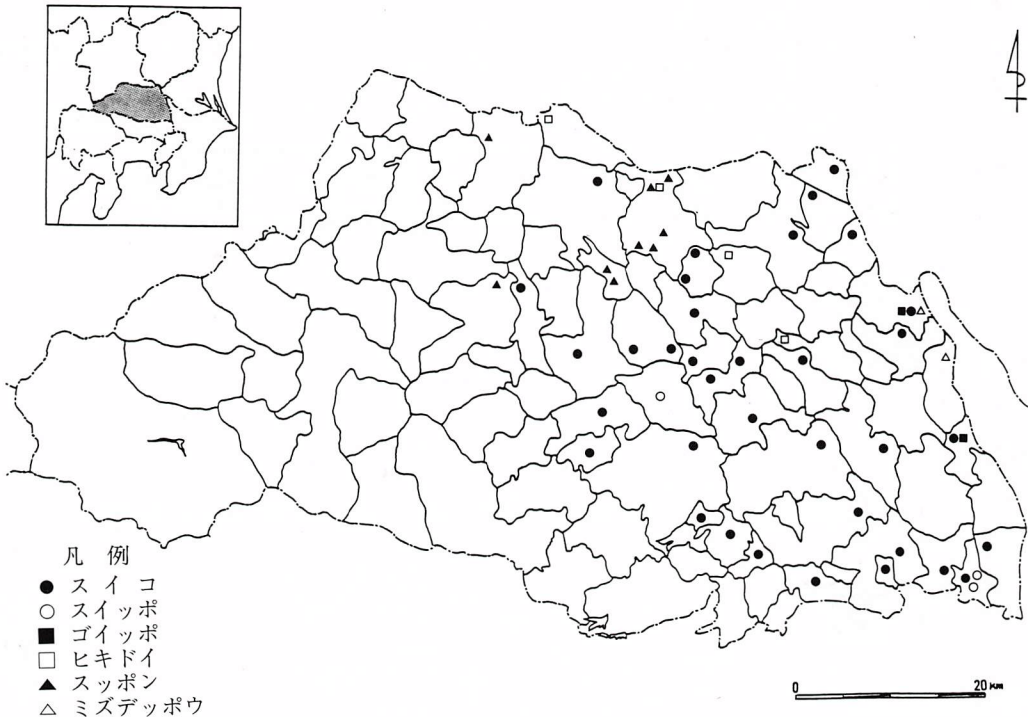
県内の事例を見ると、スッポンとかスイコという呼称が多く見られる。管見するところでは、スイコの方が広範囲に及び、ポピュラーな呼び方とも思えるが、当館所蔵の資料は全てスッポンという地方名なので、小稿ではとりあえずスッポンという名前を使うことにする。

スッポンは、木製の筒からスッポンスッポンという音を立てて水が吸い出される様子を表した呼称であろう。場所的には行田市周辺に多く見られるほか、小川町や深谷市にも分布するが、これまで調査した限りでは県南には見られない。これが県外にどうひろがっているのか、今のところ知るデータは持ち合わせていないが、遠く奈良盆地や高知県土佐山田町でもスッポンと呼ぶ事例が見られる。

スイコという呼び方は、広い地域で見られる。しかし、呼称は同じでも、さまざまな字があてられている。一例を上げるならば、志木市では、「吸口」で、これは「水の吸い口」という意味にでも解釈するのであろうか。大利根町弥兵衛では、「吸呼」である。まさに灌漑にうってつけのあて字である。茨城県日立市では、「水閘」となっている。「閘」という字は、樋の口という意味がある。『広辞苑』によれば、これは水を出し、またはふさぐ戸口と記されている。また、「閘」の字は門をあけたて（開閉）するというを表している。門は、スイコの弁（羽）と考えればこの語句が何を表現しているかは容易に見当がつく。このほか、「吸子」（鶴ヶ島町）という字をあてている例もあるが、ここに記述した字句はいずれもスイコの機能を的確にとらえたものといえることができよう。いずれにしても、この呼称は、県内でいちばん広く使われている。ちなみに手持ちの資料によれば、県外でこの呼び方は、さきの日立市のほか東京都調布市や栃木県野木町で見られる。今後の調査で、近県にかけての多少の広がりには把握できるかも知れない。

スイコに似た呼び方で、スイッポという事例もある。これは、川島町や八潮市、川口市などでみられる。スイコがなまった言葉のように感じられるが、より臨場感のある表現のように受けとれる。県東部の幸手市や庄和町では、ゴイッポともいうが、スイッポがさらに変化したととらえられよう。また、県内では現在まで確認されていないが、シッポウと言うところ（宮城県石巻市）もある。

ヒキドイは、「引樋」という字を書くところが多く、地域的には、妻沼町、行田市北部から騎西町それに白岡町にかけての県北東部を中心に見られる。「樋」とは水を導き送る長い管のことで、道具



第3図 呼称の分布

そのものを表しているといえる。これを引き棒で引くことによって水を確保するという意味であろうか。実にこの機能の特徴をたくみにとらえた言い方である。茨城県牛久町でもヒキドイと呼んでいたが、こちらは昭和35年ごろまで使用したという報告（『写真で見る農具民具』）がある。

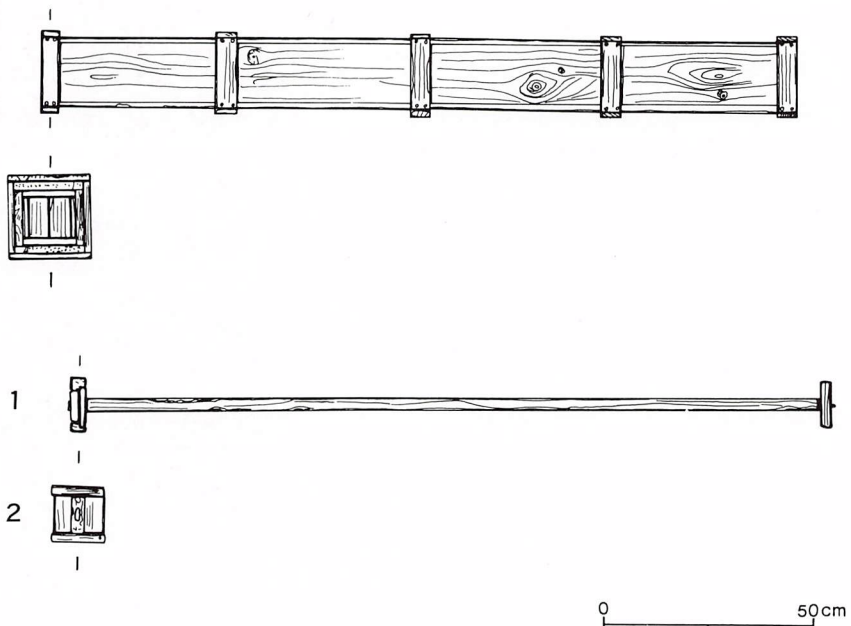
ほかに、この道具の原理を表現したもので、ミズデッポウの呼称が幸手市や松伏町で見られたが、局地的である。

このように、呼称の分布の一例をながめたが、いまだ事例が少ないため、正確な実態を把握するまでには至っていない。しかし、この調査で見た限りでは、スイコが広範囲に分布し、スッポンは限られた地域に点在するというおおまかな特色が感じられるもののそれぞれ混在するところもあり、明確でない。このことについては、もう少し調査したあとで分析することが望ましいが、おそらく誰かが何らかの理由でその地域にこれを最初に取り入れた際に呼称もいっしょに伝わったのではないかと考えられる。

## 2 使用法と年代

スッポンは、低い位置にある水を高いところにある田へ汲み上げる道具で、水鉄砲の原理を応用したものである。第4図は、行田市埼玉で昭和12年まで使われていたスッポンを図示したものであるが、1の棒を箱状の筒に差し込み、2の部分の開閉により水を引き込むのである。1の部分は、ヒキボウ、2はハネとかリュウコシなどと呼ばれている。ヒキボウは、ちょうど手で握りやすい太さに調節されている。県内のスッポンは、筒が四角い箱型のものでほとんどであるが、栃木県野木町に見られるように、丸い筒の中にラセン状に板を取り付け、その中心部へ回転棒をはめ込んだものもある。棒のなかほどには回転翼を付ける。これを岸へ固定し、先を川へ浸して回転棒を回して水を汲み上げるのである。

さて、スッポンの操作であるが、第5図に示すとおり、先端が水中につかるようにし、本体を杭

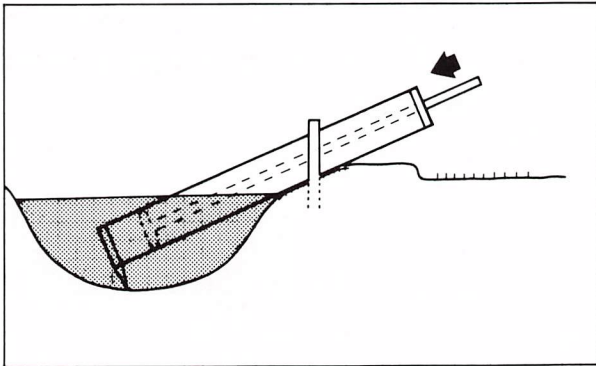


第4図 スッポン（採集地 行田市埼玉）

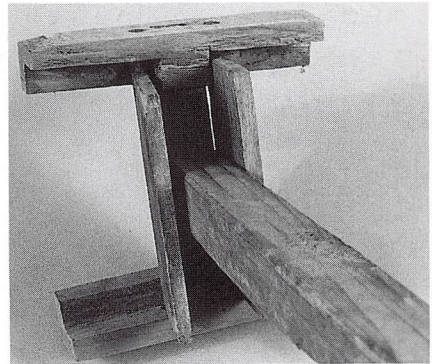
で結わえ付け、動かないようにする。先端が直接底につくと泥水をすくい上げるおそれがあるので、先へ脚をつけたりする。スッポンが岸边に密着する部分は肥料用のカマスなどを敷き。振動によって土がくずれたりスッポンが動かないようにする。操作は、ヒキボウを筒へ差し込んで押すと水につかったハネが開き、水が筒に入り込むのである。水を揚げる場合は、第5図のようにヒキボウを引く。するとハネが閉じて水を押し上げるしくみになっている。

スッポンは、ミズグルマに比べ、持ち運びが便利で、狭いところでも使えるという利点がある。価格も「米一俵かかる」といわれたミズグルマより格段に安く、入手しやすかったと伝えられている。しかし、オケよりもらちはあいたが、あまり能率的とはいいがたかった。この作業は、女の人や子供が手伝うこともでき、使い手によって差はあるが、1時間に2畝とか、半日で5畝あるいは相当早い人で1反という事例がある。また、これはずっと下を向き、腰を曲げたままの姿勢で働かななくてはならなかったので、とても疲れる仕事だった。その点ミズグルマは柱につかまり、ハネを踏むだけでよかったので、かなり楽だったという。そればかりか、ミズグルマを踏む作業は、「下を向いたままのスッポンに比べ世間じゅうが見えるし、飽きなかった」という人もいた。

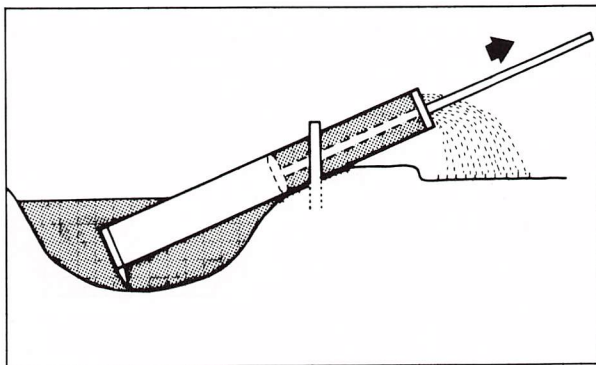
このように、手間のかかるスッポンは、主として苗代への灌漑に用いられた。あと少しで田植えが終わるような状態で、ここへ水が入ればきまりがつくという時に、いく人かでスッポンを使って水田へ灌漑することもあった。このほか、カイドリを行う場合にもスッポンが利用された例もある。



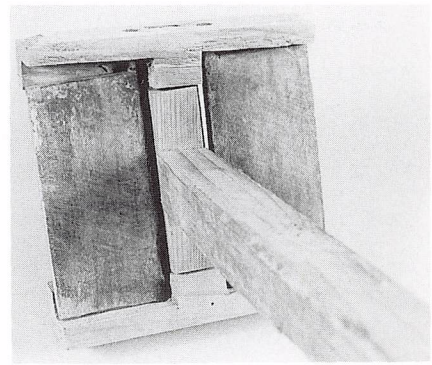
第5図-1 スッポンの使い方



ハネが開く



第5図-2 スッポンの使い方



ハネが閉じる

スッポンの使用年代については、いくつかの節目が見られる。詳しい事例は、第3表に示したとおりである。これらから判断すると、終期についてはおおよその見当がつくものの、入手時期は、大半がはっきりせず、自分が使う時にはすでにあったというケースが多い。これを見ても、この調査は少し時期を失した感がないでもない。それゆえ現在できるだけ記録にとどめておくことが望まれるのである。いずれにしても、今回調査したスッポンはほとんどが大工の製作によるもので、明治・大正に新調したものをそのまま使い続けてきたのである。

次に、各地の事例を示してみよう。

#### 事例1

田の畔にスッポンを杭で止め、用水を入れた。昭和8年に用水路が整備されるまでよく使った。大きな田はミズグルマを用いたが、地区に3台しかなかった。スッポンは、苗代など主に小さな田に使った。(行田市樋上)

#### 事例2

スッポンは、苗代を作る時、田に水を入れるのに使用。昭和12年に耕地整理が行われると使わなくなった。(行田市埼玉)

#### 事例3

第二次世界大戦ごろまで、苗代へ水を入れるのにスイッコを利用した。その後野良に井戸ができたので、モーターで汲み上げるようにした。(川島町平沼)

呼 称	採 集 地	材質	使用年代	法 量 (cm)
スッポン	行田市埼玉 (H家)	杉	明治～昭和12年	長さ 181 幅 20×20 ヒキボウ 181
スッポン	行田市埼玉 (H家)	杉	明治～昭和12年	長さ 188 幅 20×20 ヒキボウ 176
スッポン	行田市齊条 (T家)	杉	明治～昭和12年 ～昭和30年	長さ 166 ヒキボウ 185
スッポン	行田市須加 (S家)	杉	大正～第二次世界大戦	長さ 180 幅 20×20 ヒキボウ 168
スッポン	行田市荒木 (T家)			
スッポン	川里村広田 (S家)	檜	～昭和20年	
スイコ	大利根町弥兵衛(K家)	杉	大正～昭和20年	
スイコ	幸手市平野 (K家)	杉	明治～昭和12年	長さ 182.4 ヒキボウ 232.2

第3表 スッポン



#### 事例4

スイコは、昭和20年ごろ耕地整理によって水路が整備されるまで、苗代の水入れに使用した。ミズグルマは、使ったことがない。(川里村広田)

#### 事例5

スイコは、大正の初め、大工に作ってもらった。昭和20年ごろまで、水田に水を入れるのにこれを用いていたが、農業用電力がひかれ、バチカルで水を揚げるようになった。(大里根町弥兵衛)

#### 事例6

苗代や植田に水が入らない場合は、水桶やスイコ、足踏みの水車が明治以来使われていたが、第二次世界大戦に入るころから石油発動機や電動機によるバチカルポンプに変わった。(加須市)

#### 事例7

水不足の時、スッポンで川から田に水を引いた。これは、昭和の初めに大工に作ってもらったもので、昭和20年ごろまで使った。以後はモーターになった。(大里村相上)

#### 事例8

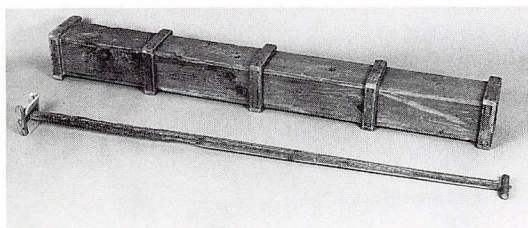
ヒキドイは、大正初期に大工に作ってもらった。昭和25、6年ごろまで、苗代の灌漑に使った。昭和28年、耕地整理で用水路ができると使わなくなった。(騎西町道地)

#### 事例9

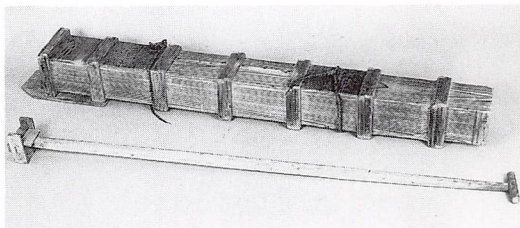
田植え時の水入れに、スッポンを用いた。これは、大正初期に棒屋でつくってもらった。昭和24年にバチカルを導入するまで使った。今は、ヒューガルである。(大里村向谷)

#### 事例10

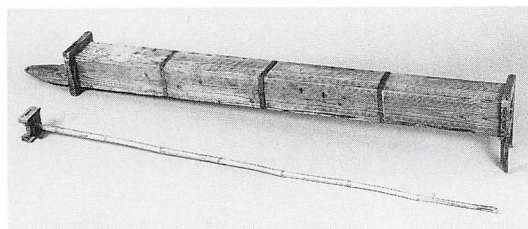
スイコは、昭和33年まで使った。主に渇水時に堰を設け、田へ水を入れるのに用いたが、その後バチカルというポンプに変わった。(富士見市渡戸)



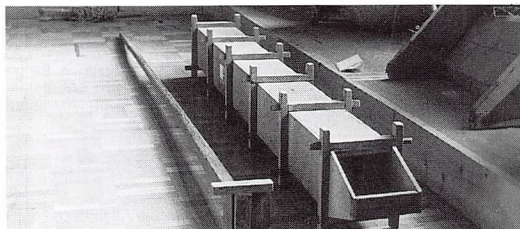
スッポン (採集地 行田市埼玉)



スッポン (採集地 行田市樋上)



スッポン (採集地 行田市谷郷)



ヒキドイ (白岡町立大山民俗資料館所蔵)

## 事例11

スイコは、昭和40年前後まで使った。苗代に水を入れるために用いたが、オカナワシロになってから使わなくなった。(三郷市彦川戸)

このように見てくると、スッポンの使用年代は、製作ははっきりしないものの終期についてはいくつかのまとまった時期があるように感じられる。それを大別すると、昭和の初めごろ、第二次世界大戦、それに昭和30年代をあげることができる。変化の理由は、用水路の整備と機械力の導入が考えられる。それと、従来と農業の方法が変わり、苗代を作って水を入れる必要がなくなったことも要因にあげられよう。第二次世界大戦直後の混乱期と昭和30年代の日本経済の高度成長期がこうした農具にまで変化を及ぼしたといえようが、後に述べるように灌漑用具の変遷のしかたは、「オケースッポンーミズグルマーポンプ」という図式を描くのではなく、スッポンから一気にポンプに変わる傾向が多いように思われるのである。

### 3 使用範囲

スッポンが使われていた地域は、おおむね第3図の「呼称の分布」として示したものと一致する。地形的にみると、おおまかにいって外秩父山地の東側で用いられたといえよう。県北の本庄台地や櫛挽台地でも今回の調査では使用例が見られなかった。江南台地から妻沼低地にさしかかる川本町では、昭和20年代以前に見たという人もいるが、呼び方までははっきり覚えていないという。その南東にあたる大里村は、やはり低地で用いられていたが丘陵では使われなかったという。こうしてみると、スッポンが平坦地の道具であることがはっきりするが、その中でもよく使われたのは水利の不便なところである。羽生市発戸では、大正から稲作を営んでいた人にたずねても、スッポンというものを見たことも聞いたこともないという。低地稲作地域にもかかわらずこのような現象がみられるのは、ここが利根川のほとりで、水の供給に事欠かなかったためだと思われる。行田市渡柳の金子保雄氏のお話によれば、羽生方面をさしてミズバと呼んだという。ミズバとは湿地帯のことで、堀割も多く、自然に水が集まったのである。同じことが入間東部の三芳、大井から所沢にかけての稲作地帯にもあてはまる。この辺りは柳瀬川をはじめとする河川や湧水で水をまかなっているといわれ、灌漑用具はそれほど普及しなかったという。

ところで、奈良県立民俗博物館発行の『水と生活』には、スッポンについて次のようなくだりがある。

スッポンは、山間部の急なところで用いた。水量の少ない川の水をせき止めて、深さ約1メートルの水をためて、一方の端をそれにつけておよそ15度の角度で山田にさしかけ、中の棒を押し引くと水が上がってきた。5畝の田に水を入れるのに半日かかった。

これをそのまま解釈すると、スッポンは山間地域でも使用されたということが出来るが、県内ではさきに示したとおり、秩父地方をはじめ、比企・入間西部においても使用例がない。これらの地域では傾斜地が多く、自然の流水でまかなったり、滑川町に見られるようなため池の利用が行われたのである。気候等のちがいで奈良の方がどうしても灌漑用具を使わなくてはならない必要があったのか、今後比較検討の余地がある。

## IV おわりに

埼玉県内では、平坦地特有の灌漑用具であるスッポンについてながめてきた。同じ道具でも地域によってさまざまな呼称のあることが改めて確認された。このうち、スッポン・スイコ・ヒキドイが県内の代表的な例といえる。このデータが何を物語るのか今のところ定かでないが、広い地域に及んでいるのはスイコであること、スッポンは県の北西部、ヒキドイは、北東部を中心に分布する傾向を示すことがわかった。スイコという呼称が広く見られるのは、そのあて字が道具の機能そのものをさしていることとあながち無関係ともいえないように思われる。

スッポンの入手については、それに直接携わった人はほとんど見られず、先代が大工に作ってもらった事例が多い。また、完成品を購入したという例はなく、製作依頼によるものが多かった。

この調査を始める前は、灌漑用具の変遷を「オケースッポンーミズグルマ」というようなパターンをたどるものと予測していた。ところが実際は、一部で「スイコーミズグルマーガチャガチャ（足踏揚水機）ー発動機ーモーター」というパターン（八潮市上馬場）があるものの、おおかたは、スッポンあるいはミズグルマから発動機やモーターの揚水機に変わっている。耕起用具のような、いくつかのパターンに基づく変化のしかたはあまり認められない。つまり、スッポンに変わってミズグルマが用いられるようになったのではなく、時期的に同じころに使われていたのである。それどころか、ミズグルマの方が早く姿を消しているところもある（第1、2、3表 参照）。このことは、ミズグルマが高価で、大きな農家でなくては入手しにくく、一般にあまり定着しなかったことと関連がうかがわれる。ここであえて耕起用具と比較するならば、エンガやマンノウあるいはオンガにしてもミズグルマほど値が高くはなかったであろうし、普及しやすかったのではなかろうか。このことは農具の価格を十分調査のうえ検討したいが、灌漑用具の変遷は、その必要性和価格とが密接にからみあい、反映されているということができよう。

いずれにしても、今後さらにデータを集積させることによって、より正確な分析をはかりたいと思う。今回は、流通面にまで及ぶことができなかったが、それらも併せて着目してゆきたいものである。

おわりに、この調査にあたり多くのかたがたから貴重なデータを与えていただいた。記して謝意を表する次第である。

### <参考文献>

- 日本学士院編『明治前 日本農業技術史』1964 日本学術振興会
- 大蔵永常「農具便利論」『日本農書全集 第十五巻』1977（社）農山漁村文化協会
- 『写真でみる農具民具』1988 農林統計協会
- 『下野の民具 2』1976 栃木県立郷土資料館
- 『目で見える米づくり 農具の歴史』1977 静岡市立登呂博物館
- 『米づくりと農具』1979 東北歴史資料館
- 『水と生活ー大和の水の歴史』1985 奈良県立民俗博物館

- 『農具－用具による農耕文化のあゆみ』1986 茨城県立歴史館
- 『日立市郷土博物館 展示あんない』1986 日立市郷土博物館
- 『水の文化－木によるはたらきかけ－』1986 石巻文化センター
- 『収蔵資料目録Ⅰ』1981 埼玉県立歴史資料館
- 『収蔵資料目録Ⅱ』1988 埼玉県立歴史資料館
- 『北武蔵の農具』1985 埼玉県立さきたま資料館
- 『新編 埼玉県史 別編3 自然』1986 埼玉県
- 『大宮市史 第五巻』1969 大宮市役所
- 『上尾百年史』1972 上尾市役所
- 『桶川の民俗資料』1974 桶川市教育委員会
- 『庄和町の百年』1975 庄和町教育委員会
- 『資料目録』1978 上福岡市郷土資料館開設準備室
- 『吉見町史 下巻』1979 吉見町
- 『鶴ヶ島民具図誌』1979 鶴ヶ島町史編纂室
- 『浦和市史 民俗編』1980 浦和市
- 『川口市史 民俗編』1980 川口市
- 『八潮の民俗資料 1』1980 八潮市役所
- 『加須市史 通史編』1981 加須市
- 『八潮の民俗資料 2』1982 八潮市役所
- 『岩槻市資料 第十三巻』1982 岩槻市史編さん室
- 『川越地方郷土研究』1982 国書刊行会（復刻）
- 『民具』1983 松伏町教育委員会
- 『八潮の民俗資料 3』1983 八潮市役所
- 『埼玉県入間東部地区の民俗－民具』1984 埼玉県入間東部地区教育委員会連絡協議会
- 『幸手町民具写真集』1984 幸手町教育委員会
- 『戸田市史 民俗編』1985 戸田市
- 『騎西町史 民俗編』1985 騎西町教育委員会
- 『志木市史 民俗資料編Ⅰ』1985 志木市教育委員会
- 『民俗資料収集目録（昭和59・60年度）』1986 浦和市教育委員会
- 『杉戸町民具調査報告書』1987 杉戸町教育委員会
- 『北本市史 民俗編』1989 北本市教育委員会
- 『所沢市史 民俗』1989 所沢市